

2013.11.26 (火) 社会学部チャペル

「キャサリン妃のフェミニズム、わたしのフェミニズム」

村田 泰子 社会学部准教授

わたしは学生時代と研究者になってから、あわせて4年間をイギリスで過ごしました。イギリスはフェミニズム発祥の地とも言われ、サッチャー元首相をはじめ、女性が多く活躍する国です。みなさんが「フェミニズム」と聞いてまず思い浮かべるのも、サッチャー首相のように男性と対等に議論をしたり、仕事をしたりする女性の姿かもしれません。しかし、フェミニズムには、もう少し別のかたちもあるとわたしは考えています。今日は、イギリス王室のキャサリン妃ことキャサリン・ミドルトンさんを取り上げ、フェミニズムのもう一つのあり方について考えてみたいと思います。

キャサリンさんについて、まず話題に上るのは、彼女がいわゆる「一般家庭」の出身だということです。キャサリンさんの両親は、イギリスのレディングという町で、子ども向けのパーティー・グッズを販売する会社を経営していました。キャサリンさんは進学したスコットランドのセント・アンドリュース大学でウィリアム王子に出会い、恋に落ちます。未だ階級制度の色濃く残るイギリスにおいて、二人の結婚は、王室に新しい風を吹き込むものとして関心を集めました。

ところが、結婚した彼女に対する評価は、好意的なものばかりではありませんでした。なかでも、作家でフェミニストの、ジョアン・スミスによる評価は手厳しいものでした。ジョアン・スミスは、著書のなかで、キャサリンさんはあたかも時代を逆行するかのように、女性としての伝統的な生き方を選択していると述べています。ジョアン・スミスによれば、キャサリンさんが大学を卒業してから30歳になるまでに成し遂げたことといえば、ボーイフレンドを支え、彼と結婚し、間もなく彼との初めての赤ちゃんを妊娠した、ただそれだけです。キャサリンさんには個人としてのキャリアもなければ、アイデンティティもない。彼女は、女性を二流の人間と位置づける王室の伝統にただ従っているだけの、「Queen of the WAGs」だとまで言い放ちました。「WAGs」というのは聞きなれない言葉かもしれませんが、「wives and girlfriends」の略で、フットボール選手のように著名な男性と付き合ったり、結婚したりすることを人生のゴールのように考える女性たちを揶揄する言葉です。同時に、「wag」という動詞には、犬が尻尾を振って、飼い主のご機嫌を伺うという意味もあります。なかなか、手厳しいですね。わずか30歳の若さであれだけの注目を浴びながら、よくやっていると思うのですが、歴史的に、長い時間をかけて女性の個人としての権利や自由を勝ち取ってきたイギリスの主流のフェミニズムからすれば、キャサリンさんのような生き方は、歯がゆいもののように映るようです。

そんななか、キャサリンさんに対する評価が、部分的にはありますが覆されるような出来事がありました。それは2013年の夏、彼女が第一子を出産し、初めてメディアの前に姿を現したときのことです。キャサリンさんはその日、明るいブルーの水玉模様のワンピースを着ていました。ワンピースの下からは、産間もない、ある意味生々しいまでの「母」のお腹が、ぼっこりと突き出ているのが見えていました。このことは、イギリス中のメディアを騒然とさせました。というのも、イギリスでは、女性はずねに完璧で美しいからだであるべきとする女性美の規範が存在し、とくに、彼女のように社

会的に地位のある女性は、産後、凄まじいまでのダイエットをしたり、締め上げたり、ときには手術までして、元のスレンダーな姿でメディアに登場するのが慣わしだったからです。おそらくキャサリンさんは、そうした規範の存在を十分に意識した上で、あのような姿で登場することを選んだのでしょう。そこには彼女の、成熟した一人の女性としての、意志の表明を見て取ることができます。

また、面白かったのは、イギリスの女性たちの素早い反応でした。多くの女性が、キャサリンさんの選択を「**brave**」と褒めたたえました。あるタブロイド誌が、「ケイトの産後の減量計画」と題した揶揄的な記事を発表すると、すぐさま女性たちのあいだから雑誌の不買行動が起こったり、ツイッターなどのソーシャルメディアをつうじて、自身の産後のお腹を晒す女性が現れたりしました。

これら一連のやりとりについてわたしが面白いと思うのは、時機を得たキャサリンさんの行為と、それに素早く反応した女性たちの行為が、イギリス文化に支配的な女性美の規範を、一時的にはあれ、揺るがした点です。ジョアン・ウルフは、キャサリンさんの生き方はフェミニズム的でないと言いましたが、キャサリンさんはキャサリンさんにしかできないフェミニズムを実践したと言うことはできないでしょうか。このように、何がフェミニズム的で、何がフェミニズム的でないかは予め定まったものではなく、一人ひとりの実践のなかで立ち現われてくるものと考えたら、フェミニズムをもっと身近なものとして感じるができると思います。今日のこの話が、授業で学んだフェミニズムとみなさん自身の人生をつなぐものとなれば幸いです。